

見えないボールの跳ねる音

Bouncing Sounds of an Invisible Ball

澤田 華

Sawada Hana

2018年4月13日 金 __ 4月29日 日 月曜日休廊

11:00 - 19:00 / 金曜日20:00まで

これは()である。

写真を指で指し示しながら()に当てはまる答えを探究すること、「これ」と指し示す指の先に注意を向けることを同時に行なうのが今回の試みである。

括弧の中に入る答えを導き出そうとしているとき、「これ」はかつてそこにあったであろう何かを指し示すものとしての確に機能しているように見える。

しかし、それはある一つの都合の良い解釈に過ぎず、「これ」が何を指し示しているのかを曖昧にしたまま話を進めているのだ。

「これ」と指差す先には、かつてそこにあったはずの物体そのものも、括弧に入る答えも、本の写真、印刷物の網点、モニターの表面、過去 / 現在、様々な要素が含まれていて、変化することさえある。

それでもなお、指先は「これ」らしい部分を指し続けているのである。

近年制作している「Gesture of Rally」シリーズは、ノイズとして排除されてしまうような写真の不鮮明な細部を起点とし、分析・検証を繰り返しながらイメージの誤読を重ねることで、「写されたもの」の認識を問う作品である。「Gesture of Rally」(ラリーの身振り)という言葉は、ミケランジェロ・アントニオーニ監督の映画『欲望』のラストシーン、パントマイムでテニスの試合をする人々を写真家である主人公が眺める場面から着想を得ている。この映画の中で主人公が、自分の撮影した写真に死体のようなものが写っていたのを見つけたように、わたしは古本に載っている写真の中に勝手に事件を見出していく。写真に小さく写り込んでいた正体不明の物体を巡って繰り返し広げられる不毛なラリーは、答えを宙づりにしたまま、延々と繰り返される。

澤田 華

1990年、京都生まれ。2014年、京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画コース卒業、2016年、京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。これまでの個展に、2017年「ラリーの身振り」(KUNST ARZT・京都)、2015年「[C][A][T]」(kara-S・京都)、2014年「Second contact」(KUNST ARZT・京都)。おもなグループ展に、2017年の「1floor2017『合目的的不毛論』」(神戸アートビレッジセンター)、「場 | BA」(愛知県美術館ギャラリー「室」)、「写真新世紀展2017」(東京都写真美術館)、「未来の途中の星座」(京都工業繊維大学美術工芸資料館)、「群馬青年ビエンナーレ2017」(群馬県立近代美術館)、2016年の「Reproduction」(成安造形大学ギャラリー「アートサイト・滋賀」)。おもな受賞には、2017年「第40回写真新世紀」優秀賞、「群馬青年ビエンナーレ2017」入選がある。

2014年に京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画コースを卒業、2016年に同大学大学院芸術研究科博士前期課程を修了した澤田華(さわだ・はな / 1990年・京都生まれ)は、2017年に「未来の途中の星座-美術・工芸・デザインの新鋭9人展」(京都工業繊維大学 美術工芸資料館・京都)への選抜・参加、公募企画展「1floor2017『合目的的不毛論』」(神戸アートビレッジセンター・兵庫)への出品、「群馬青年ビエンナーレ2017」(群馬県立近代美術館・群馬)への入選、「第40回写真新世紀」の優秀賞受賞など、その精力的な活動に呼応して、評価・注目を集めています。

澤田が近年に制作している「Blow-up」シリーズや、「Gesture of Rally」シリーズにおいて、印刷物やウェブ上の画像投稿サイトにある写真に小さく写り込んだ「正体不明の何か」に眼差しを向け、「これは何か?」という問いを立てることを起点に、その解析・推理・検証のプロセスを作品として提示してきました。

本展『見えないボールの跳ねる音: Bouncing Sounds of an Invisible Ball』は、「Gesture of Rally」シリーズの最新作として、Gallery PARCの3フロアのすべてを一つの作品として構成されています。本展において澤田は、「Mr. ピーンの人」のグラフィック印刷写真を出発点に、写り込んだ「何か」をカタチや撮影された状況などを手がかりに、色・カタチ・大きさなどからの想像、あるいは画像検索を用いた検証と推論のプロセスが展開されています。しかし、この「これは何か?」からはじまる問いは、「これは〇〇である」という答えにたどり着くことはありません。

写真はその特性として、「過去」に「何か」が「そこ」に「あった」ことを示します。この特性は澤田の作品において、「かつて何かがある」という事実として扱われ、そこから検証が生じています。

写真を指差しながら発する「これは何か?」は、写真に写っている未知の事物を指した「これは『何か?』」という問いとなるでしょう。そして、この問いは「これは煎餅である」や「これは干し大根である」や「これは聖体である」や「これは餃子の皮である」など、無数の「可能性」に行き当たりますが、決して事実としての答えに行き着くことはありません。また同時に、写真を指差しながら発する「これは何か?」は、いま指を差している事物がそもそも何であるかとする「『これ』は何か?」という問いともなります。そして、この問いは「これは写真である」や「これは網点である」や「これはインクである」や「これは映像である」や「これはモニターである」などの無数の「答え(事実)」を含み、やはりひとつの答えには行き着きません。

写真を指して発する「これは何か?」という問いは、「答え(過去の物事)」を巡る精度の高いやりとりとして機能しています。しかし、同時に「『これ』は『何か?』」という問いは、「問い(現在から未来への未知)」そのものを巡る曖昧で矛盾したやりとりでもあるといえます。

《Gesture of Rally》シリーズの最新作によって構成される本展『見えないボールの跳ねる音 Bouncing Sounds of an Invisible Ball』は、写真に小さく写り込んでいた正体不明の未知を巡って繰り返し広げられる不毛なラリーであり、答えを宙づりにしたまま、未来に向かって延々と繰り返されます。

* 本展は「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭」のサテライトイベント『KG+』に SPECIAL EXHIBITIONとして参加しています。

KG+